

当院輸血部門におけるタスク・シフト/シェアを通じた若手技師育成について

◎吉田 雅弥¹⁾、吉丸 希歩¹⁾、渡辺 琴乃¹⁾、平木 幹久¹⁾、西山 陽香¹⁾、福岡 星夜¹⁾、内田 有咲¹⁾、山崎 卓¹⁾
熊本赤十字病院¹⁾

【背景】輸血・細胞治療に関するタスク・シフト/シェアは「血液製剤の洗浄・分割、血液細胞（幹細胞等）・胚細胞に関する操作」「輸血に関する定型的な事項や補足的な説明と同意書の受領」「救命救急処置の場における補助行為の実施」などが挙げられる。当院は医師の働き方改革に対応するため、タスク・シフト/シェアの推進が掲げられ、輸血部門においても業務を開始した。

【業務内容】当院の輸血療法の実情に合わせて、輸血を必要とする血液・腫瘍内科外来患者への輸血療法の補足的な説明と同意書の受領を行うこととした。また、輸血関連情報カードを発行・配布し、患者への説明も開始した。さらに救命救急センターにて大量輸血プロトコル(massive transfusion protocol; MTP)発動時の臨床支援も試験的に開始した。開始直後はすべてのタスク・シフト/シェア業務は認定輸血検査技師が中心に行った。その後、教育し力量が十分と判断された若手技師は単独業務を可能とした。また、各業務の統括に若手技師を任命し、業務改善や見直しを実施してもらうこととした。

【効果】タスク・シフト/シェアに関する業務は継続することが重要であり、少人数で実施することは難しく、若手技師の活躍が望まれる。各業務の担当に若手技師を任命したことで責任感が生まれ、自主性と改善活動への意識が高まった。また、検査室外に出ていくことで多職種と積極的にコミュニケーションを取るようになり、若手技師の院内における認知度も向上した。

【課題】輸血療法の補足的な説明と同意書の受領や輸血関連情報カードの発行・配布に伴う患者説明は内容の定型化や時間に余裕があるため、若手技師を中心に行うことは可能である。しかし、MTP発動時の臨床支援は症例により状況が変化し、臨機応変な対応が求められるため、教育が困難な現状である。現在は試験運用のため、救命救急センターのスタッフと協議しながら、教育体制を確立したい。

【まとめ】タスク・シフト/シェア業務を通して若手技師の責任感や自主性が生まれた。課題は残るが次世代を担う若手技師の育成は院内における臨床検査技師の地位向上に寄与していると思われる。 連絡先：096-384-2111